

大阪市中央公会堂の建築

山形政昭

はじめに

大正7年11月17日に落成開館した大阪市公会堂^①は、近代大阪の都市形成において、また様々な歴史の舞台として重要な役割を担ってきた建築である。実際、商都大阪の中心、土佐堀川を挟んで旧船場の北に位置する中之島地区には明治12年に豊国神社が京都より勧進され、明治20年代に早くも公園として整備が始まる。そしてここに大阪ホテル（明治35年）、市立公会堂（明治36年）^②が建ち、さらに日本銀行大阪支店（明治36年）、大阪図書館（現、大阪府立図書館、明治37年）の建築によって公的空間としての役割が与えられていく。当時大阪市役所は江ノ子島に仮建築を建てていたが、明治40年代に入ると新たな庁舎の建築と移転問題が起こる。そうした明治44年に株式取引所仲買人の岩本栄之助^③より公会堂建築費の寄付が寄せられ、翌明治45年に中之島を建築地とする大阪市役所庁舎^④と大阪市公会堂の建築設計競技が相次いで行なわれた。そして数年後にその両建築が竣工したことにより、現在へと至る中之島一丁目の景観は一応の完成を見たのである。以来、「公衆ノ便益ニ供スルガ為」^⑤に寄付され実現した公会堂は、様々な講演集会の他、広く芸術文化活動に供する公共建築として、かつ都市の偉観を担う建築として今日に至っている。

そうした視点で比較し得る大正初期の建築には、煉瓦造の長大な建築を構えた東京駅舎（竣工大正3年）、横浜の開港記念横浜会館（竣工大正6年）^⑥などがある。因みに京都では大正5年に和風御殿風の公会堂を建てて

おり、東京の日比谷公会堂の竣工は昭和4年のことだった。

ここでは大阪市公会堂の設計競技から建設までの経緯を追って、その計画と意匠の特色について述べるものである。なお本稿は筆者の小稿「中之島公会堂—設計者と意匠について」^⑦を下に加筆改稿したものである。

1. 公会堂の設計競技

岩本栄之助の寄付によって公会堂建設の方針を固めた大阪市は、明治44年8月に市長の植村俊平を理事長とする財団法人公会堂建設事務所（公会堂事務所と略記す）を設立し、建設事業に着手した。公会堂事務所は日本建築学会及び建築顧問を委嘱していた辰野金吾^⑧の意向をうけて、明治45年（大正元年）10月末日を提出期限として17名の建築家による指名コンペ（懸賞競技設計）^⑨が実施され、提出された13名^⑩の設計案のなかから、大正元年11月27日の日本建築学会における審査委員会おい



1. 明治中期に設けられた中之島公園は、大正期の公会堂、市役所庁舎建築の時期に土佐 堀川添いの公園整備が進められた。

て工学士岡田信一郎⁽¹¹⁾の案が一等最優秀案として選ばれたのである。

ところで、この岡田案と、これに基づいて建てられた公会堂建築を見る上で次の点に留意する必要がある。

一つは、このコンペ規定に記されていた設計条件、及びこのコンペ方式の特色についてである。設計条件には「各室ノ数及面積ハ希望ノ大要ヲ示スニ過ギズト雖モ総建坪ハ七百坪以内トス」として、具体例としての各界平面を示すライン・ドローイング（略平面図面）まで示されていた。また応募案の審査は、財団理事長の植村俊平と、建築顧問の辰野金吾、そして13名の応募者全員が委員となる珍しい互選方式で行なわれた。このことから設計案の審査には、コンペを取り仕切っていた辰野の内意が相当に反映されただろう状況が窺える。

そしてコンペの設計案に対して応募規程では「当選シタル設計ハ勿論提出シタル設計ハ当事務所ノ所有ニ帰シ意匠ノ取捨配合ハ随意ニ之ヲ為シ得ルモノトス」と謳われていた。それによって、最優秀案の岡田案を基に、実施設計を実質的に進めた辰野片岡事務所⁽¹²⁾によって、修正され実施設計が作成されている。

2. コンペの勝者・岡田信一郎

東京帝国大学建築学科を明治39年に卒業した岡田は、その6年後、29才にしてこのコンペの勝者となっている。岡田は在学時より注目された優秀な学生で、卒業時には恩寵の銀時計を授与されている。その力量は円熟期の設計作品である歌舞伎座（東京銀座、大正11年）、ニコライ堂の改修（東京御茶ノ水、昭和5年）、明治生命館（東京丸ノ内、昭和9年）など現存している建築にも窺えるが、公会堂のコンペの頃には美術学校講師及び早稲田大学講師を務め、西洋古典の研究に没頭していたという。

ところでこの時期、我国の建築界は明治初期の西洋建築の習得段階を卒えて、新しい時代を反映した西洋様式建築の導入について模索していた。その象徴的なイベントが日本建築学会の主催により明治43年に開催された「我国将来の建築様式を如何にすべきや」と題した講演会であり、西洋建築の直截的導入だけでは十分とせず、

日本の伝統を反映した我国固有の近代建築の創出が待望されていた。

さらに明治後期にかけて欧州の先進諸都市で芽吹いたセセッション、アール・ヌーヴォーなど新しい建築様式が紹介され、それら新様式を取り入れた建築作品が現われつつあった。

気鋭の研究者、岡田はこうした時代の動向に敏感であったはずで、東京美術学校、早稲田大学理工科を場として西洋建築研究をすすめ、言論活動を盛んにしていた。一方、設計活動では卒業直後の明治39年に恩師の辰野が建築顧問であった警視庁の設計に関わり、明治41年には辰野の配下で日本銀行小樽支店の設計に臨んでいる。そして公会堂の設計コンペの勝利によって一躍注目されるが、建築家として開花するのは大正中期、東京美術学校教授に着任した頃からである。

岡田案は、正面中央部に立つ4本のジャイアント・オーダー（様式に従う柱の構成）、その上部をまとめる大きな半円アーチの構成など、当時我国では宮廷建築の数例を除いて未だ例のないネオ・バロック的壮麗さを有したもので、その造形力は応募案のなかでも確かに一步勝ったものだった。そして意匠表現の巧みさとともに、岡田案は公会堂事務所が示した計画概要に最も忠実に従ったものの一つであり、かつ外観の化粧煉瓦壁を華やかに演出した辰野式と称される様式に準じたものだった。つまりこの設計コンペ及び建築学会の指導的立場にいた辰野が求めていたものを見事に具体化したものだったと思われる。

辰野の期待に応えた最優秀の設計案であったが、そのままに実施設計へと進められたのではなく、公会堂事務所によって「意匠ノ取捨配合」の手が加えられた他、設備、構造計画が入念に検討され進められていった。そして竣工した公会堂においては設計・監督者として辰野金吾、片岡安、つまり辰野片岡事務所として記録される⁽¹³⁾に至り、岡田信一郎は原案設計者に留まり、実施設計以降に関わることはなかった。後節にて、この設計の変更部を指摘してゆきたいが、まずは岡田案の特色を見ておきたい。

3. ネオ・ルネサンス様式と辰野式

様式について竣工時の建築記録⁽¹⁴⁾には「復興式中準パラデヤン式」とある。所謂ネオ・ルネサンス式と考えてよい。古典系の建築では通例オーダーと称される円柱やピラスター（付柱）の構成、そして頂部を飾るコーニスやアーキトレブが壁面を分節し、外観の枠組が構成される。そして古典的なモチーフでデザインされた開口部が壁面に配置され、壁面と窓で織りなされる一種の諧調が与えられる。

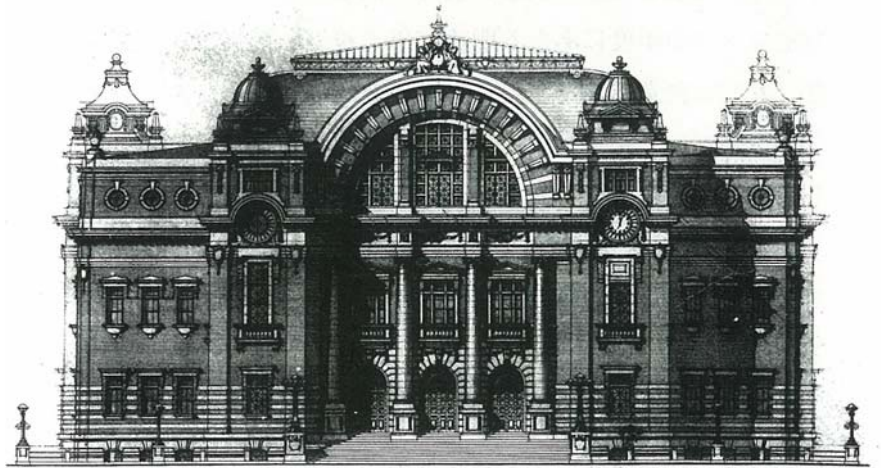
公会堂の意匠はこのネオ・ルネサンス式として概ね読み解かれるものである。しかし当初の岡田案ではその枠組みを越える表現が所々に見られるものだった。

例えば、正面中央部に立つコンポジット式の柱頭をもつ4本のジャイアント・オーダー、階段室の外壁面に付与された長大な窓とその上部に置かれた円窓、そのシャフトの頂部には華麗な小ドームが冠され、その上には彫像や尖塔飾りが置かれていた。そして正面上部の半円アーチの構成については次節にて触れるが、総体にその意匠は多彩で劇的構成を特色とするバロック的な表現が導入されたものであった。

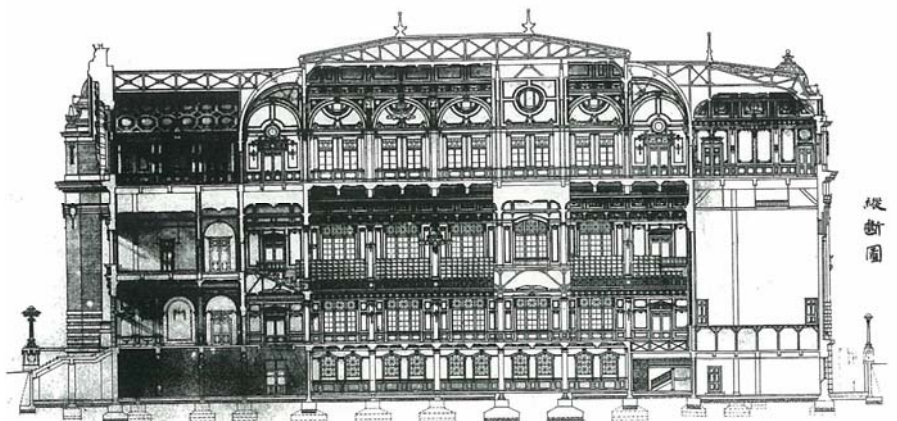
さらに外観の構成はネオ・ルネサンス式の枠組みに納まらない煉瓦壁の処理がある。壁面は四隅のコーナーで限定されず側面に回り込み、煉瓦造のヴォリューム感が強調され、1階に並ぶ窓の縁石は、煉瓦と花崗岩の縞模様のなかに取り込まれている。つまり、分節的なクラシカルな枠組みに限定されない煉瓦造の自在な表現が導入されているのであり、赤煉瓦の壁面上にクラシカルなモチーフが浮遊し、流動しているようにもみえる。この様式をフリー・クラシック、さらに具体的には辰野式という。辰野式に関しては藤森照信博士の詳細な論考⁽¹⁵⁾があり、それによって以下に述べる。

明治期の建築界に君臨した辰野は明治35年に工科大学（現東京大学）を辞して後、東京で辰野葛西事務所、大阪で辰野片岡事務所を開設し、いよいよ設計活動に重心を移している。そのなかで最も得意にして多用した煉瓦造建築の様式が、辰野式と呼ばれたもので、後段7節に記すように、大正期の東京駅、そして公会堂建築の時期こそその最盛期にして最も豊饒な建築が造られた時代であった。

また岡田案に見る内部諸室の意匠は、竣工した公会堂に比して、装飾的意匠が密度高く織り込まれていた。例えば、大小の集会室の天井にはミューラル・デコレーション（装飾を施した梁型）が多用され、（レセプションホールの天井を油彩画で飾る計画はまだない）、開口上部のアーキトレブには花綱装飾が華麗に付されるなど、



2. 岡田信一郎の応募図案 正面図



3. 岡田信一郎の応募図案 東西断面図

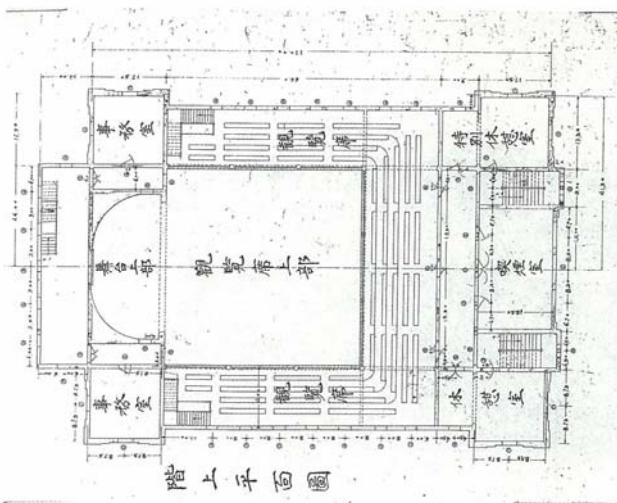
全体に稠密なネオ・ルネサンス式のインテリアが計画されていたのである。

4. 大アーチのファサード

公会堂の特徴的といわれるファサードの構成について、岡田の評伝的資料⁽¹⁶⁾で指摘されている二つの建物がある。一つは岡田の卒業設計作品である劇場建築案(明治39年)。一つは警視庁の主任設計者福岡常次郎の下で設計に関わった警視庁舎(東京日比谷、竣工明治44年)である。特に後者はファサードの中心的モチーフとなる大アーチとそのその両脇にクポラを配した塔状の構えは公会堂のそれに共通するものであった。

もう一棟、見過ごし難い建築に辰野片岡事務所の設計で公会堂コンペの年度にあたる明治45年に竣工した堺市公会堂(大浜公会堂)がある。古典様式を用いた木造2階建ての建築だったが、早くに焼失したためこの建築に関する資料は乏しく⁽¹⁷⁾、建設の経緯など明らかではないが、大阪市公会堂との意匠的類似性もあり、また大阪市公会堂の設計コンペに添付されたライン・ドローイングとの関連性を窺わせるものがある。

5. 大阪市公会堂新築図面



4. 堺市公会堂 階上平面図

公会堂の最優秀案として岡田案が選出された後、辰野金吾による「大阪市公会堂設計図案概評」⁽¹⁸⁾が公表され

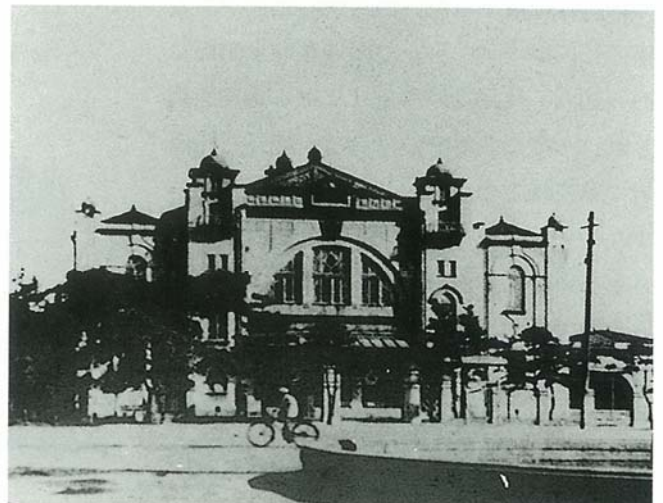
ている。そこでは全体として岡田案の勝れていることを賞賛しているのにつづき、改善すべき事項として次のことが指摘されていた。

第一に、玄関及び大集会室のある一層目階高の低いこと、つまり岡田案では大集会室上部のギャラリーに開く窓を主とした南北面の外観意匠が構成されていたのである。次に、外壁のコーニス(軒蛇腹)が水平に通っていないこと。正面左右の階段室の塔状壁面に配された大時計を停車場風として好ましくないと考えられていたことなど。総じて岡田案に表現された古典式を逸脱したバロック風と見られる特色について批判されていたのである。

また、工事費用70万円の予算を前提として⁽¹⁹⁾、仕上げの代案を次のように記している。「石材を擬石塗りに変更し、或はワニス塗りをペイント塗りに落とし、或は材料の品位を下げる等の方法を講ずれば、超加工費の大部分を減少することも出来る途がある」と、興味深い指摘を行っていた。

そして、公会堂建設事務所、実質的には辰野片岡事務所により岡田案を基として全体構成及び部分的意匠に関して手が加えられ、大正2年春に実施図面としての大阪市公会堂新築図面が作成された。

ところでこの公会堂建築図面は行方知らずとなっており、僅かに内部諸室の展開図の複写図⁽²⁰⁾が伝えられている。また昭和12年の部分改修時に当初図面からトレース



5. 堺市公会堂、明治45年

複写したものと思われる平面図、立面図等の一部⁽²¹⁾が残されている。それに加えて工事仕様書⁽²²⁾、工事着手前に

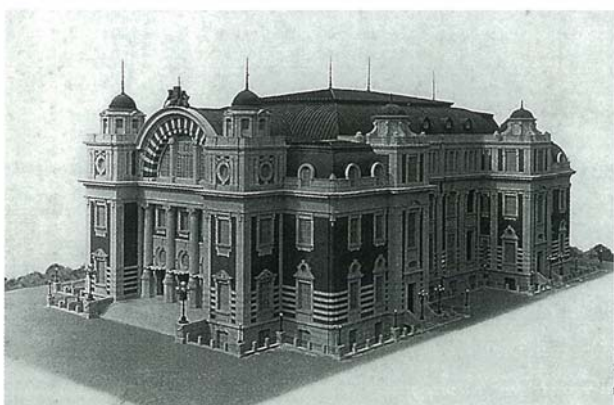
作成された精巧な模型写真⁽²³⁾があり、かつ公会堂建築そのものが、後に改修が加えられているものの良く維持されていることで当初の設計内容は概ね分かるのである。

さて、岡田の設計原案から実施建築設計への変更は次の3点に集約できる。

第1に、建築規模の縮小化。コンペの規程で建坪「七百坪以内」とされていたのに従って、岡田案では695坪に収めていた。それをさらに642坪⁽²⁴⁾に減じている。その調整は玄関ホールの間口60尺を54尺に、大集会室外部側壁長さ90尺を80尺と改めるなど、各所の柱間を狭くしてなされている。

第2に、外観意匠の修正。辰野自ら「意匠がゴツイ、枯れていない、若い、」⁽¹⁸⁾と評した岡田案を、自負を持っていた辰野式（フリー・クラシック様式）の構成へと修正を加えたこと。そして窓上部のペディメント（屋根形装飾）を付したアーキトレーブや、付柱に付された楕形飾りなどの古典的オーナメントを平面的幾何図形化したセセッション的意匠へと転換させたことである。この表現は辰野のパートナーであった片岡安の得意としたもので⁽²⁵⁾、コンペにおける片岡案（図7）のデザインとの関連に興味深いものがある。

第3に、装飾に導入された和風表現。岡田案の室内意匠に見る稠密な洋風の古典的意匠は、経費の軽減化からか、全般的に平明なものへと転じている。その一方で貴賓室の壁画及び天井画など特徴的な和風の表現が所々に加わることである。



6. 大正4年に制作された公会堂模型

こうした修正が加えられたものの、岡田案の個性もよく活写され実施計画の設計がなされた。とくに主要室の

内容は岡田案、ひいては設計コンペ規程に示されていた諸室の要件を忠実に具体化したものだった。なお階数表示に関して、コンペにおいては半地階、1階、中2階、2階とされていたが、実施設計に至って地階、1階、2階、3階と改められている。設計段階における主要室の内容についてここに略記しておく。

地階／食堂及び酒場。調理室。配膳室。暖房機関室。

小使室。宿直室。倉庫。

1階／大玄関（室の左方に衣帽置場、右方に貴賓用階段を置く）。大集会室（奏楽用演説用の広間、席数は3千。舞踊演劇にも供し得る舞台。客席は固定せず、大食堂、柔剣道の武道場としても利用し得る平土間床とする）。左右玄関4室。事務室。予備室3室。

2階／大集会室上部階段席。市長室。新聞記者室。予備室7室。物置。

3階／大食堂（1千人の立食、或いは5百人の会食に供する食堂）。中食堂（百人の会食に供する食堂）。貴賓室（東側正面に大円窓を有する貴賓用待合室）。喫煙室2室。配膳室3室。扇風機室（館内換気通風のための設備）。

他各階／便所4箇所。階段6箇所。昇降機2箇所。



7. 片岡安の応募図案 正面図

6. 工事方式と建築費

公会堂の建設工事経過について、次のように記録⁽²⁶⁾されている。

大正2年3月1日 建築設計承認願、肝付兼行市長に提出。

大正2年3月9日 地鎮祭。

大正2年6月28日 工事着工。

大正3年8月 鉄骨組立工事着手。

大正4年10月8日 鉄骨組立て完了し、定礎式(定礎を東南隅に設置)。

大正7年10月31日 工事完工。

大正7年11月17日 落成報告祭⁽²⁷⁾。

当初大正6年末の竣工が予定されていたものだったが、着工の翌年、大正3年7月8日に第一次世界大戦が起り、戦時下の影響を深刻にうけたことで、10ヵ月の遅れを生じて竣工している。この時期は歴史の伝えるように株価の暴落、戦時需要による好景気、そして物価の高騰と世情不安がつづいていたのであり、工事費の運用と資材の調達には極めて厳しい時代であった。

ところで本工事はその性格により、特定の建設会社の一括請負方式を採らず、公会堂事務所による直営方式で行なわれた。つまり清水組大阪支店を主とするものの、

石材工事矢橋商店、煉瓦納入大阪窯業、鉄骨工事高田商会、家具装飾東京三越呉服店、高島屋大阪支店など、約70社、千余件の工事発注が行なわれている。つまり戦時経済下という困難な時期に、工事管理者の努力により、「各種材料工手間の暴騰に際して各工事関係者が飽くまで当初の契約を履行するに躊躇する処なく、時日の切迫に遭遇するもよくその完成に絶大の努力を継続し…」⁽²⁸⁾進行的な進捗であった。工事費は岩本栄之助の寄付による100万円とその利息10万円を合わせた110万円で計画され

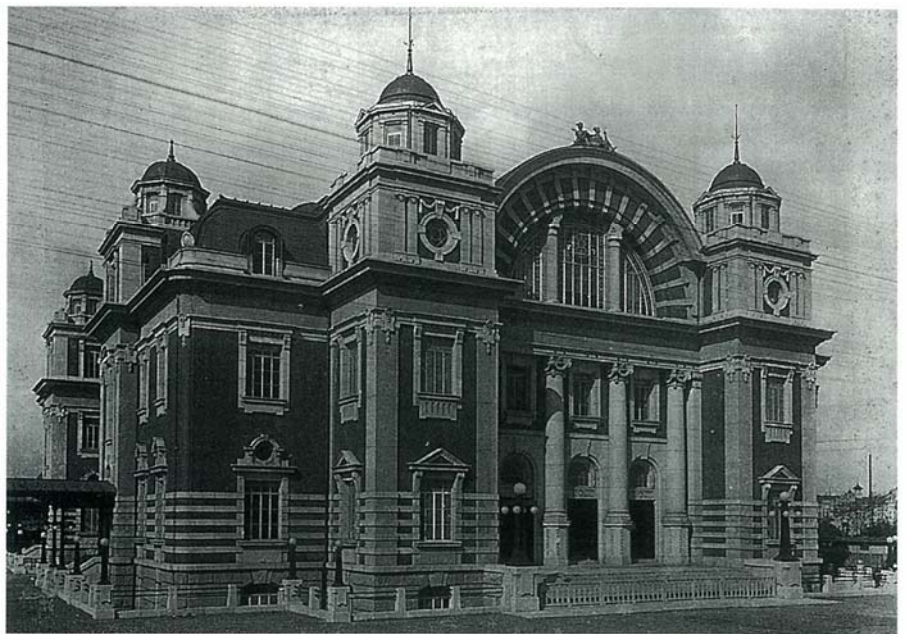
⁽²⁹⁾、竣工開館までに工事総額112万円が費やされたが、その内には食器、花瓶、時計など細微な器物まで含めら

れていた。

7. 辰野式煉瓦建築としての公会堂

煉瓦壁を主体として花崗岩やテラコッタ等で開口部や壁面頂部をクラシカルに装飾し、また水平帯をリズムカルに配して赤と白の対比で古典的かつ華やかに構成した様式を辰野が好んで用いたことから辰野式と呼ばれている。その時期は辰野が工科大学教授を辞してフリーの建築活動を始めた明治36年から大正8年に没するまでの16年間にわたる。その間各地に120棟余りの赤煉瓦建築が建てられたが、現存する代表的な建築には日本銀行京都支店(現、京都文化博物館、竣工明治39年)、日本生命保険九州支店(現、赤煉瓦文化館、明治42年)、盛岡銀行(現、岩手銀行中ノ橋支店、明治44年)などあり、最大の規模を有する大作が東京駅(着工明治39年、竣工大正3年)、そして晩年の大作として大阪市公会堂がある。この辰野式という流れのなかで、公会堂の特色について次の2点が指摘できる。

まず、「一つの顔の内に、フリーとクラシックの二つの横顔をを秘めている」⁽¹⁵⁾といわれるようにオーダー(柱形の構成)やドームなどの古典様式を活用しつつ、



8. 竣工時の大阪市公会堂

全体として自由で無限定なヴォリューム感を演出するのが辰野式の特色なのである。実際その特質は時代と共

に深化していったと見られるが、公会堂においては逆に古典的な性格を鮮明に表現したものへと転じている。つまり正面及び側面に並ぶ長大な列柱と2重に冠されたコーニス（軒蛇腹）の重厚な表現があり、それを劇的なものへと転化させる大アーチの導入という個性的な構成をとっている。この外観は岡田の原案を基とした結果であるが、古典様式へと振れた辰野式建築の成果として特筆されるものであるだろう。

次に、帳壁式鉄骨煉瓦造⁽³⁰⁾という補強煉瓦造建築の典型として、東京駅に並ぶ大作であったこと。

「鉄骨煉瓦造石造ニシテ鉄筋混凝土ヲ混用ス」⁽³¹⁾と記された公会堂は、鉄筋コンクリートの基礎の上に、鉄骨を構造主体とし、それを煉瓦、石、或いは鉄筋コンクリートで被覆した壁体及び柱で構成され、床は鉄筋コンクリート、屋根の主体構造は鉄骨という混構造に特色がある。この構造方式は明治42年竣工の丸善株式会社社屋を初期作例として普及し、大正初期においては最も信頼されたものであり、最大の成果が正面長さ184間（335m）地上3階軒高55尺（16.6m）の東京駅であり、関東大震災でも殆ど無傷で耐えたものだった。公会堂は建築面積ではそれに及ばないものの、3階軒高は64尺（19.4m）、大株上端まで88尺（26.7m）と東京駅に勝り、かつ内部に梁行100尺、桁行116尺、2層吹き抜けの大空間をもつ大集会室を置くという挑戦的な試みに挑んだものだった。また外壁仕上げでは煉瓦壁体に「石材及化粧煉瓦ヲ張付ケ其他ハ擬石塗ヲ施ス」と記されるように、煉瓦積みと見られる壁面は厚さ15ミリの煉瓦タイル張りであり、基部の本石積みにつづいて石面に見える上部の過半は擬石塗り仕上げとなっている。

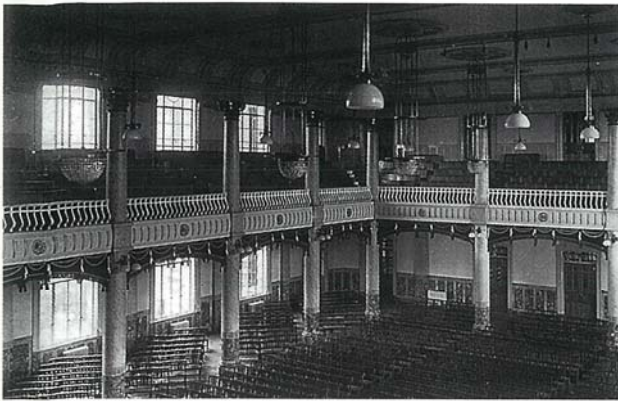
このように辰野式といわれる建築において時代と共に構造、仕上げの技法においても逐次改良が加えられてきたのであり、構造強度、施工性の面においても辰野式建築工法は当時最も信頼されていたものだった。しかしその時代は辰野の没した4年後、大正12年の関東大震災により終り、以後鉄筋コンクリート構造が主流となる。

内部意匠は外観に準じてネオ・ルネサンス式が基調であるがその幅は広い。各室ごとに種々の柱頭飾りを備えた列柱、付け柱、扉建具枠回りの意匠などがあるが、音響と材料の関係で最も工夫された部分として天井回りの意匠装飾のことが指摘されている⁽²⁸⁾。そして諸室に配されたステンドグラス、種々の灯具や家具調度も特色あるものが多い。モダンな構成といえばエレベーター・シャフトを挟む階段の構成や地階食堂のインテリアがある。そうした洋風の幅広いデザインに加えて、注目すべき和風意匠がある。大集会室では折り上げ天井の扱い、プロセニウム・アーチを飾る伎楽面の木彫があり、大食堂側壁にはユーモラスな動物を図案化したグリルなどが目につく。そして著名なものに貴賓室（特別室）に描かれた松岡壽画伯⁽³²⁾の天井画と壁画⁽³³⁾がある。また松岡の原画に基づく商業の神「メルキュール」と科学・平和を象徴する「ミネルバ」の神像が竣工時には正面大アーチの屋上に置かれていた。

ところで実施の設計図面から工事途上において数ヶ所の意匠が変更されている。例えば正面玄関扉上部の3つの円窓が、半円形のアーチ窓になったこと。そして大食堂（現、中集会室）壁面回りのギャラリーの天井構成は当初屋根の形状に沿う円弧状だったが、半円ヴォールト状に変更されている。また、外部の南北面に設けられた4つの玄関に、ブロンズの円柱と鋼材を組み立てた特色あるキャノピー（庇）が設けられている。これは岩本栄之助が「雨天の際の公衆の為に」⁽²⁷⁾と付けさせた氏の人柄を偲ぶエピソードとして伝えられているものである。

ところで公会堂は建築後19年目の昭和12年に、正面玄関前車寄せ及び玄関ポーチ上部の庇の設置、大集会室の客席（座席数1706）及び天井の改装、音響、照明設備の改修工事などが行なわれている。そして戦時中の金属類供出により多くの装飾金物を失っている。戦後、数次の改修工事⁽³⁴⁾により補われたものもあるが、鋼鉄製の玄関扉、正面屋上の神像は失われたままであり、当初のものと思われてもペンキが塗り重ねられ、家具調度の多く

8. 室内意匠について



9. 1階 大集会室



10. 3階 貴賓室（現特別室）

は移動し入れ替えられている。今、歴史的建築としての公会堂を考えるには、そうした部分を古写真や資料を手掛かりに補い、竣工時の意匠を回想して見る必要があるのである。

9. 公会堂の現況

公会堂の歴史的、地域的文化財としての価値については従来より広く認められているところであるが、その評価と保存価値について初めて具体的な見解が示されたのは昭和46年にさかのぼる。その年日本建築学会近畿支部は大阪市の依頼をうけて「大阪市近代建築調査報告書」⁽³⁵⁾をまとめ、中之島東部に集積する近代建築について高く評価されたのである。この指摘をうけて中之島の歴史的環境に目を向ける市民グループにより「中之島を守る会」が翌年設立されている。それより十数年を経て⁽³⁶⁾、公会堂の保存再生の方針を大阪府が明らかにしたのは昭

和63年のことであり、平成元年に「中央公会堂将来構想検討委員会」（委員長 足立孝）が設置され、平成3年に保存並びに再生・活用についての答申がなされ、つづいて平成4年に「大阪市中央公会堂基本計画策定委員会」（委員長 足立孝、平成5年より金多潔）が設置され、平成7年に耐震性を確保するための構造補強、復元を基本とした外観保存、内部保存及び活用のための機能性の向上を図る改修を骨子とした基本計画が答申されている。そして翌年、計画を実施に移す設計者として坂倉・平田・青山・新日設設計共同企業体が選定され、平成8年春の基本設計着手から実施設計、そして平成11年3月工事に着工され、平成14年秋の竣工が予定されている。

こうした経緯を経て、現在進行している公会堂保存・再生プロジェクトは、近代建築の保存再生工事の一つ⁽³⁷⁾として、その計画及び技術的成果に加え史的検証の対象として把握されるべきものであろう。

おわりに

これまで公会堂建築の原案となった岡田信一郎による設計案の特色から、辰野片岡事務所による建築作品としての公会堂に至まで、その経緯を追い、意匠上の着目点について述べてきた。これによって大阪市公会堂の建築は大正初期に盛期を迎えていた我国煉瓦造建築の一つの到達点を示すものであったことを明らかにしたと考えている。

つづいて、この建築を通して、当時の建築生産技術、建築仕様についての研究を進め、実態としての公会堂建築について知見を深めてゆきたい。それによって保存修復される公会堂の価値と、再生の意味について掘り下げてゆきたい。

公会堂の保存・再生プロジェクトにおいては、その実務担当組織に加え、種々の専門分野をもつ委員による「公会堂保存・再生プロジェクト技術検討会」が設置され、そのなかに本学藤本康雄教授を主査とする歴史分科会が置かれ、筆者も委員の一員として加えられている。

本稿は、この公会堂の保存・再生プロジェクトに関わ

りつつ、同時に平成9、10年度の塚本学院教育研究補助費を与えられた「大阪市中央公会堂の建築に関する研究」の成果としてまとめたものである。末尾ながら貴塚本学院並びに公会堂保存・再生プロジェクト技術検討会、そして公会堂の建築調査に際して協力と種々の助言を頂いた関係諸氏に記して謝意を表したい。

註

- (1) 大正7年の開館後、天王寺公会堂（註2）と区別するため、正式には大阪市中央公会堂と称される。建築計画及び建設事業は大阪市公会堂として進められたものであり、ここではその名称をとっている。
- (2) 『明治大正大阪市史』昭和9年、によると、明治36年に大阪で開催された内国勸業博覧会に関連する集会施設として建てられた。木造2階建て、鉄板葺き屋根、外壁漆喰塗り、345坪の建築。新たな公会堂建設の始まる大正2年に天王寺公園に移設され、天王寺公会堂として昭和11年まで使用された。
- (3) 明治10年、岩本栄蔵の次男として大阪南区に生まれる。明治39年に家督を継ぎ、株式仲買人として活躍。明治42年に澁沢栄一を団長とする渡米実業視察団に大阪財界代表として参加。米国の事業家を範として公共事業への寄附を心に決めたといわれている。帰国後再び澁沢栄一や名士の意見を聞き、明治44年に公会堂建築費として100万円を寄附。その後相場に破れ、大正5年10月に自決した。（池永治雄『公会堂の恩人岩本栄之助』大阪市役所、昭和29年。柴田正巳『近代大阪と岩本栄之助』(7)などによる）
- (4) 大阪市役所庁舎は公会堂に僅かに先行した設計コンペ（明治45年3月発表、同8月提出、大正元年10月審査）で小川陽吉による設計原案が決定された。
建築工事は公会堂の竣工近い大正7年6月に着手され大正10年5月に竣工している。正面の玄関上部に塔を配したネオ・ルネサンス式の庁舎は、昭和57年に建て替えられるまで使われた。
- (5) 明治44年、岩本栄之助の「寄附申込書」
- (6) 横浜会館の建築は、開港50周年にあたる大正2年、設計コンペにより東京市技師福田重義による設計案が選ばれ、さらに横浜市技師山田七五郎らの実施設計により、大正3年9月に起工、大正6年6月竣工した。赤レンガのネオ・ルネサンス式の建築で、両脇に塔とドーム屋根を配した華やかな外観をもつ。大阪市中央公会堂よりやや小振りの総面積463坪で内部に1,200席の公会堂などを有する。関東大震災被災後、昭和2年に修復され、さらに平成元年に失われたドーム屋根などの復元再生工事が行なわれている。
- (7) 『中之島公会堂』日本建築学会近畿支部発行、1989年
- (8) (1854～1919)。明治17年に工部大学教授（後の東京帝大）、明治19年に造家学会（後の日本建築学会）を創設し会長となる。以来、明治大正期の建築界を強力に指導した建築家。
- (9) 公会堂の設計競技は、日本建築学会誌『建築雑誌』（明治45年5月号）に発表されている。コンペの審査結果は『建築雑誌』（大正元年12月号）に報じられ、さらに『大阪市公会堂新築設計指名懸賞競技応募図案』（公会堂建設事務所、大正3年9月）が発行され、応募図面の他、競技規程、競技者心得などが記録されている。
- (10) 岡田信一郎、長野字平治、矢橋賢吉、伊東忠太、中篠精一郎、大沢三之助、大江新太郎、片岡安、田辺淳吉、武田五一、宗兵蔵、塚本靖、古宇田実。
- (11) 岡田信一郎（1883～1932）の履歴は、昭和7年の没後に記された「岡田信一郎君を弔ふ」（『建築雑誌』昭和7年5月号）、大川三雄「岡田信一郎年譜」『日本の建築明治大正昭和／様式美の挽歌』三省堂、昭和57年、pp. 195～198に詳しい。卒業後の職歴は、警視庁及び日本銀行事務嘱託を経て、明治40年東京美術学校講師。明治44年より早稲田大学講師を兼任し、翌年教授。大正12年東京美術学校建築科の開設に伴い主任教授となり、以後活動の場の中心とする。
- (12) 明治35年に工科大学を辞した辰野は、翌年東京で辰野葛西事務所、明治38年大阪に辰野片岡事務所を開設し、設計活動の場とする組織を置いた。パートナーとした片岡安（1876～1946）は明治30年卒業後、日銀技師となり、翌年日銀大阪支店の建築工事に際して来阪し以来大阪に根づいた。公会堂の工事関係者には、辰野、片岡の両氏の他、工務主任の谷民蔵、工務員の永野房吉、長田次郎ら、当事務所員が多数を占めていた。
- (13) 『近代建築画譜』昭和12年、などの記録
- (14) 日本建築学会誌『建築雑誌』大正4年3月号、大正8年5月号。日本建築協会誌『建築と社会』第1輯14号、大正7年12月などに報じられている。
- (15) 藤森照信「辰野式」『日本の建築明治大正昭和／国家のデザイン』三省堂、昭和54年、pp. 139～155
- (16) 前野嶋 「岡田信一郎」『日本の建築明治大正昭和／様式美の挽歌』三省堂、昭和57年、pp. 114～130
- (17) 『堺市史』第3巻、昭和5年、p. 1063。の記述。建築平面図（堺市蔵）などが知られる。
- (18) 『建築工芸叢誌』第22冊 大正2年11月
- (19) (9)の競技規程のうちに「建築物ハ鉄骨構造ノ見込ニシテ総工費ハ七拾万円以内ノ予定トス」とある
- (20) 東京大学生産技術研究所、藤森研究室蔵
- (21) 大阪市中央公会堂蔵
- (22) 建築工事仕様書には岡田信一郎による「大阪市公会堂新築設計仕様概要」、公会堂建設事務所による「大阪市公会堂建築設計図案付録設計仕様概要」が伝えられている。（公会堂蔵）
- (23) 公会堂建築図面を基にした模型が大正4年3月に制作され大阪市において関係者及び一般に公開されている。『建築雑誌』大正4年3月号所収。模型写真は大阪市中央公会堂蔵。

- (24) 1階の延床面積による。地階ドライエリアを含めた建築面積は659.3坪
- (25) 辰野片岡事務所の作品においても直線化、単純化された細部装飾、セセッションの影響が表れているものは片岡の好みによるものと見られている。(石田潤一郎『関西の建築』pp.16～17)
- (26) 「中央公会堂の歩み」『大阪市中央公会堂60年誌』1978
- (27) 落成の記録は「大阪市公会堂落成奉告祭 - 本日舉行」『大阪朝日新聞』大正7年11月17日の紙面など
- (28) 谷民蔵「大阪中央公会堂建築工事に就いて」『関西建築協会雑誌』第1輯14号
- (29) (28)において「純建築費及び器具装飾費を合して約八十五万円、維持費約十万円、経常費約十万円、敷地整理費約五万円則ち百十万円を計上したる也」とある。
- (30) 菅田豊重「東京駅などを中心とする鉄骨煉瓦造」『日本近代建築学発達誌』日本建築学会編、1972年、丸善
- (31) 「大阪市公会堂建築概要」日本建築学会誌『建築雑誌』大正8年5月号
- (32) 松岡壽(1862～1944) 明治9年工部美術学校の創設と共に入学し、フォンタネージのもとで洋画を習得し、明治12年に師の帰国を機にイタリアに留学、ローマ美術学校で学ぶ。パリを経て明治21年に帰国し東京高等工業学校、東京美術学校教授に着任し美術教育に、そして浅井忠らと明治美術会を結成し活躍する。古代神話を画題とした公会堂の壁画は珍しい作品であり、我国歴史画の優品として知られている。(『松岡寿展図録』神奈川県立美術館、岡山県立美術館、1989。田中敏雄「於岡寿」1996、などがある)
- (33) 壁画は四ヶ所にあり、位置と画題は天井面「天地開闢」、天井側櫛形壁「仁徳天皇」、北側壁面「商神素戔鳴尊」、南側壁面「工神太玉命」
- (34) 昭和26～28年には、全館壁面塗装、大集会室連結椅子の一部取替え工事など。昭和30～33年には、大、中、小集会室の壁塗装。各階洗面場の改修工事。各室の白熱灯を蛍光灯に取替え工事など。昭和39～43には、全館壁面塗装、大集会室リノリウム張替えなど、室内改装修理。昭和44～53年には、館内塗装、音響、照明設備の改装工事など。『大阪市中央公会堂50年史』昭和43年、等に記録されている。
- (35) 「大阪市近代建築調査報告書」昭和46年2月。調査報告は大阪市近代建造物調査特別委員会(委員長 浅野清)によるもので公会堂に関して「・・・当時としては驚嘆に値する本邦第一級の公会堂であり、大阪市民の意欲を示す点においても記念すべき建物であるが、また現在中之島の景観になくはならぬ点描となっている」と解説されている。
- (36) その間に明治建築研究会による「公会堂修理再生募金活動」(昭和62年)、朝日新聞大阪本社による「中之島公会堂・赤レンガ基金」(平成元年)などの保存要望活動があり、大阪府建築士会では平成元年に「再生案への提案」を求めるコンペが実施され、積極的な保存を提案した山崎泰孝の案が

最優秀作品に選ばれ、先に安藤忠雄が独自に発表した再生案「アーバンエッグ」とともに話題となっていた。また史的遺産としての公会堂について幅広く論じられた出版、大阪都市環境会議編『中之島・公会堂』(都市文化社、平成2年)などある。

- (37) 近年の事例では、平成7年に完工した中央合同庁舎第6号館赤煉瓦棟(旧法務省本館、明治28年)の保存改修工事、そして平成8年の旧香港上海銀行長崎支店記念館(明治37年)、そして免震工法の導入例としては、平成10年の旧神戸居留地十五番館(明治13年)などがあり、いずれも国の重要文化財建造物に指定されている。

図版出典

- 『大阪市大観』大正14年5月
3. 7. 『大阪市公会堂新築設計指名懸賞競技応募図案』(財)公会堂建設事務所 大正3年
- 堺市公会堂平面図 堺市蔵
- 『目で見る堺市の100年』郷土出版 昭和49年
6. 8. 9. 10. 「建築工事、竣工写真アルバム」大阪市中央公会堂蔵